

岡崎むかし館

つちにんぎょう  
土人形 (2) — 題材 —

三河地域は明治中頃～大正時代、「三河土人形」と総称される土人形の一大製作地でした。その特色として題材に、二躰の<sup>たい</sup>人形を<sup>かぶき</sup>組み合わせて<sup>あらごと</sup>歌舞伎の名場面(特に動きのある荒事)などを表現したものが多そうです。当時の庶民の<sup>ごらく</sup>娯楽の代表といえば<sup>しばいけんぶつ</sup>芝居見物で、祭りには芝居が<sup>えんちく</sup>演じられ大勢の人が集まりました。ですから、歌舞伎などを題材とした人形も、誰もが何の<sup>えんちく</sup>演目の場面かがわかりました。現在では娯楽も多様化し、歌舞伎芝居を身近で親しむ機会も減り、人形を見てその題材がすぐわかる人も少なくなりました。多くの土人形を目にする機会に、日本の古典芸能である歌舞伎の演目を、調べてみるのもおもしろいと思います。



大浜土人形(組物)／作:祢宜田章 弁慶(左)と富樫(右)  
[加藤庄一コレクション]

**勸進帳(かんじんちょう)**  
 みなもとのよりととも 源 頼 朝 と不和になった義経は、弁慶らとともに山伏、<sup>やまぶし</sup>強力(荷物持ち)姿に変装して逃げ、<sup>あたか</sup>安宅の関へさしかかる。関守の<sup>とがしき</sup>富樫左衛門の前で、弁慶がなにも書かれていない巻物を<sup>かんじんちょう</sup>勸進帳として読み上げたり、見とがめられた義経を杖で折檻するなどの苦労の末、許され陸奥へ落ちのびる。  
 『歌舞伎ハンドブック第3版』2006,三省堂,p267 より



大浜土人形(組物)／作:祢宜田章 重忠(左)と景清(右)  
[加藤庄一コレクション]

**菊重栄景清(きくがさねさかえのかげきよ)**  
 [通称：牢破りの景清・景清]  
 平家滅亡後も、源氏に敵対する<sup>あくしちびょうえかげ</sup>悪七兵衛景清は牢に閉じ込められ、平家の<sup>きよ</sup>重宝、<sup>ろう</sup>青山の琵琶と<sup>せいざん</sup>青葉の<sup>ふえ</sup>笛の行方を<sup>はたけ</sup>畠山重忠と<sup>いわな</sup>岩永左衛門に追及される場面。執拗な追及に怒った景清は牢をこわして荒れ狂う。  
 『歌舞伎ハンドブック第3版』2006,三省堂,p195 より